自分の力で願いを追求し遊んでいく子ども

― 年長７期の生活より ―

１　７期（６月初旬～７月中旬）のねらい

○自分の願いやめあてが実現するように，いろいろなことを考え，試しながら遊ぶ。
○思いや考えを互いに伝え合ったり，手を貸し合ったりしながら遊んでいこうとする。
○自然物や生き物に親しみをもって遊んだり，大切にしようとしたりする。

２　保育の構想

(1) 子どものとらえについて

男児６名，女児７名のクラスである。進級時にクラス替えがあった。

自分がしたい遊びにすぐに向かい，どのようにしたいかという願いや遊びに必要なものを教師に伝えながら遊ぶ子どもが多い。特に，巧技台や大型積み木を組み合わせるなど，昨年度の年長がしていたことや，年長になって使うことができるようになった金属スコップなど新しい道具に興味をもって，積極的に遊びに取り入れている。マットをどうやって固定するか，スコップをどう使うと大きな石を掘り出せるかなど，友だちの様子を見ながら，うまくいく方法を自分なりに探している姿がある。また，竹登りの竹を組み合わせる，ブルーシートのテントを張るなど，子どもではできないことでも，アイディアを伝え，なんとか実現しようとする姿もある。６期（４月上旬～５月下旬）では，面白そうなことを積極的に取り入れ，教師に願いを伝えながら遊ぶ姿が多かった。教師が一緒になって遊ぶ場面では，大勢の子どもたちが集まって一緒に遊んだ。

このように，願いをしっかりともち，教師の手を借りずに長時間遊びに向かう姿や，思いを友だちに伝えながら遊ぶ姿は５月３週より徐々に増えてきた。

(2) ７期の生活と保育で考える願いをもち遊びを追求する姿との関わりについて

上記のような子どもたちの姿を踏まえ，７期では，自分のもった願いやめあてを，できるだけ教師に頼らずに自分たちの力で実現しようとする姿を期待する。自分たちの力で実現しようとする過程で，どうすれば実現できるかを考え，試行錯誤することにより，自分がもった願いを叶えようとする思いがより深まり，遊びを追求していくと考える。さらに，友だちと互いに思いを伝え合い，イメージを共有して遊ぶ楽しさを感じることが，遊びの広がりや８期以降のクラス全体で向かう活動・生活にもつながっていくであろう。また，７期は，時期的に風や水が心地よく，植物や生き物との出会いも多いことから，自然物や生き物との関わりが今まで以上に広がっていくと考える。そこで，次のように７期のねらいと経験してほしい内容を設定した。

○自分の願いやめあてが実現するように，いろいろなことを考え，試しながら遊ぶ。
　・遊びがうまくいきそうな場所や使う道具などを探したり，道具の使い方を変えたりする。
　・何度も繰り返し楽しみ，できるようになるまで続けようとする。
○思いや考えを互いに伝え合ったり，手を貸し合ったりしながら遊んでいこうとする。
　・願いを実現するために，友だちに声をかけ一緒に遊んだり助けを呼んだりする。
　・同じめあてをもつ友だちと一緒に遊ぶ中で，自分のイメージと違うことをしている友だちのことを受け入れる。
○自然物や生き物に親しみをもって遊んだり，大切にしようとしたりする。
　・木や竹を組み合わせて基地にしたり，草花をごっこ遊びに利用したりする。
　・生き物が遊べるような場や，生き物を捕まえた場所と同じような飼育環境を作る。

(3) ７期の生活における願いをもち遊びを追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

子どもたちが自分の願いやめあてを実現しようと遊びを追求し，自分の力で実現したという満足感を感じられるように，保育構想で述べている次の３点を大事にしていく。

１点目は，見取りをもとに環境を再構成していくことである。例えば，コースを作って水を流す遊びでは，コースの最後まで水が流れるようにするために，どのようにすればよいか考えられるように実際に遊びながら試していく。今までとは違う場所に道具を用意したり，他の使えそうな道具に目が向くように並べ替えたりしておくこと等が考えられる。

２点目は，「自分でみつけた遊び」と「共有する活動」「行事」において，子どもの願いがつながるようにすることである。７期では，「自分でみつけた遊び」での発見を伝えたり困っていることを相談したりする「共有する活動」を設定することで，友だちの遊びにも目を向けることや，子どもたちが互いに手を貸し合いながら遊びを進めていくきっかけにしていきたい。そうすることで，願いを新たにもつことやこれから先の遊びへの意欲も生まれると考える。一方，課外活動で泥団子の教室があるタイミングに合わせて，用意する土や子どもへの投げかけ方を変える等，遊びと行事とのつながりも意識していく。

３点目は，遊びの「広がり」と「深まり」を意識したはたらきかけである。子どもが問いをもったとき，いろいろなことを試そうとする場合と，それについてじっくりと考えていく場合がある。７期では，これまでの子どもの姿から，じっくりと考えていく姿が増えると予想する。その時々で，同じ遊びをしている子どもたちが一緒に考えられるような言葉がけをする。さらには，クラスのみんなで課題を考える場をもつ。また，遊びの展開に応じて，新たなめあてになりそうなつぶやきを取り上げる。これらのようなはたらきかけが，さらなる遊びの追求を促すことになると考える。

３　予想される主な遊びの展開と子どもの姿

	コース作り	ごっこ遊び	竹や木に関って遊ぶ	生き物と遊ぶ
6月初旬	・「渡りやすいコースを作る」「川まで届くコースを作る」など，共通のめあてをもって遊ぶ姿が見られる。	・場所を移動しながらお家ごっこをすることがある。一緒にいてもそれぞれのイメージがある。	・高いところまで登ろうと意識し，竹やカイヅカイブキの上の方にまで登るようになる。	・自分が遊ぼうとする場所に生き物を連れて行き，生き物と一緒に遊ぶ。（この姿は７期の間ずっと続くと予想する）
6月中旬	・めあてが実現するまで，それぞれの子どもが，考えたことを繰り返し試す。友だちの考えを聞いて理解できるようになってくる。	・誰かがやったことを同じようにしたり，同じようなものを作ったりして，そこからイメージを膨らませて遊ぶ。	・今まで登ったことのないコースに挑戦しながら木に登ろうとする。足を掛ける竹やロープの場所など，登りやすくするにはどうしたらよいか考えることも増える。センダンの木に登ろうとする姿も出てくる。	・捕まえた生き物が遊べるように考えて，飼育ケースに容器を入れるなど，飼育環境を自分なりに作る。
6月下旬	・どうすればうまくいくか考えながら遊ぶ子どもが増える。泥団子を転がすなど，新しいことも試すようになる。	・それぞれの子どもが自分の思いを言葉に表す。中心となる子どもが発言することが多い。	・自分たちで木や竹を組み合わせて，椅子や基地などを作ろうとする。	・長く飼おうと意識をし，生き物が弱らないように考えて捕まえたり飼う場所を作ったりする。
7月	・コース作りに必要なものを作って使ったり，友だちの考えを取り入れて作ったものを直したりする。	・それぞれの子どもが自分の思いを言葉に表し，やり取りをしながら遊ぶことが増える。		

４　保育の実際

７期では，自分のもった願いやめあてを，できるだけ教師に頼らずに自分たちの力で実現しようとする姿を期待し，見取りをもとに環境の再構成をしてきた。この取り組みと，はたらきかけとにより，意欲的に遊ぶ子どもたちの姿が多分に見られるようになった。

「共有する活動」は，子どもの願いがつながることを意識して「自分でみつけた遊び」での子どもの姿をもとに行った。また，普段の遊びと行事のつながりも作った。これらのことは，友だちのしている遊びにも目を向け，友だちの姿をヒントにしたり今まで苦手としていた遊びに参加したりする子どもの姿につながったと考える。

はたらきかけでは，遊びの「広がり」と「深まり」を意識した。新しい遊び方が出てきた時や友だちがしてきたすごいことを試す時はクラスのみんなで共有した。深く追求していることは，簡単には理解できないため，同じ遊びに長く関わっている子どもたちで共有した。

ここまでに至る，手立てと，そこから生まれた子どもの姿を以下に示す。

(1) クラスのみんなが共有できたジャングルの遊び（子どもの姿に合わせた環境の再構成と，遊びの「広がり」を意識したはたらきかけ）

５月，体づくりの一環である「げんきっこタイム」でジャングルのダンスをし，歌詞に関連した動きを，毎日変化をつけて行なってきた。すると，子どもたちは探検するイメージをもち，虫メガネや双眼鏡をもって園庭で遊ぶようになった。

５月下旬，ジャングルが出てくる絵本を読むと，園児Ａが絵本に出てくる動物を作った。これまでのジャングルの遊びから変化していくと見取った教師は，それをクラスのみんなの前で取り上げ共有した。すると，園児Ｂがジャングルを作ることを発案した。そこで，教師は保育室の一部にジャングルを作るスペースを設けられるようにしておいた。

図１

次の日，園児Ａ，園児Ｂが段ボールで洞窟を作り始め，草や川も作っていった。教師は，いろいろな形で子どもたちが参加でき，動物や草を作って飾りたくなるよう，壁面に緑色の不織布を貼り，テーブルを緑の画用紙で覆った。また，絵本を開いてテーブルに置いた（図１）。これらの環境の再構成により，子どもたちは，木や動物を作ったり自分たちがワニになったりと，「自分でみつけた遊び」のときに，全員が何日も続けてジャングルの遊びにひたっていったと考える。その遊びのうちの一つが，図２である。

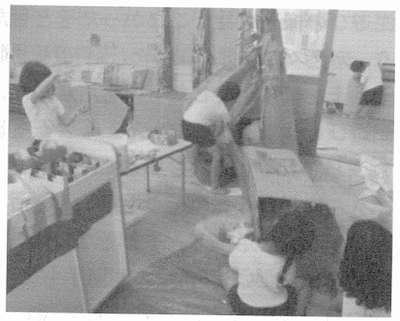

図２

図２は，ダンボールの洞窟とテーブルをつなげて長い洞窟にし，途中に宝物を隠してジャングル探検ごっこをしている場面である。子どもたちみんなが，「本当に宝物があるジャングルを作って探検する」などの願いをもち，自分たちの力で実現を目指した。ジャングルに行くための乗り物を作るときには木の組み合わせ方を考え，交代で釘を打つ，ワニになった友だちに捕まらないようにしてジャングルに行く遊びをするなど，友だちと楽しく活動をする中で，共通の願いを実現するために，いろいろなことを考え，試しながら遊びを追求していった。

ジャングルの遊びでは，子どもの姿を基に，スペースや開いておく絵本のページを変えるなどの環境の再構成を行なった。また，ジャングルそのものを作る大掛かりな制作から，宝物，乗り物な

どのジャングルに関わりのあるものを作ること，探検ごっこをすることなど，子どもたちみんなが参加しやすいようにした。言葉がけも，子どもの思いつきに「賛同する」「認める」言葉がけを多くしてきた。これらのように，遊びの「広がり」を意識してはたらきかけたことで，みんなが参加し，それぞれの願いを叶えられるように遊ぶことができたと考える。

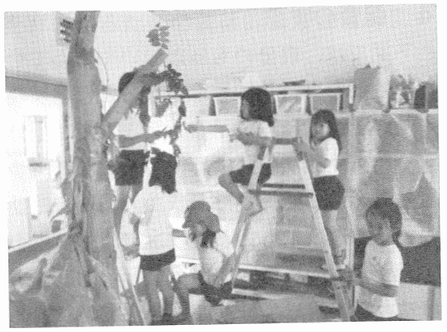

図３

図３は，６月中旬，ジャングルをより本物らしくしようと教師が投げかけた後のものである。本物に見えるよう，園庭の藤の木の枝をジャングルの木につけている。このときは，木の枝を採るための台をみんなで運ぶ，どのように貼りつけるか考えを言い合うなど，思いや考えを伝え合い，協力し合いながら遊ぶ姿が見られた。

しかし，このように，全員でさらに遊びを深めていくことは，子どもの成長の過程を考えると，この期ではまだ少し早かったとも思われた。十分に長い時間遊んで満足してきたこともあり，ジャングルの遊びはより本物らしくすることをきっかけとし，収束していった。遊びの「深まり」を意識してはたらきかけたことが，遊びの収束の原因の一つとなったと考える。

(2) 子どもの願いが強くなっていった，泥団子や土に関わっての遊び（自分でみつけた遊び，共有する活動，行事のつながりを意識した環境の構成）

本園では，子どもたちに本物の体験をしてほしいと願い，大学の先生を講師に招いて課外活動を行っている。その中の一つが「泥団子を作ろう」である。この活動を６月下旬に行う計画を立てた。それまでに子どもたちがたくさん泥団子を作り，試行錯誤できるようにした。

図４

まず，「泥団子を作ろう」の活動があることを６月上旬に伝えた。その時に，教師が作ったピカピカに光る泥団子を見せ，興味をもてるようにした。さらに，これまで外遊びを敬遠し，泥遊びの様子を見てこなかった子どもたちにも分かりやすいよう，テラスに場所を作った。最初は，園庭の泥より扱いやすい，土粘土を軟らかくしたものを用意した。これにより，それまで泥遊びをしようとしなかった子どもも自ら遊び始め，他クラスの子どもたちも連日参加して泥団子を作った（**図４**）。

さらに，３種類の土を用意し，泥団子の絵本を読んで作り方を示すと，子どもたちは「固くて丸い泥団子を作りたい」「自分の泥団子も光らせたい」「色をつけたい」など，それぞれに願いをはっきりともって遊ぶようになった。このような姿が見えたため，子どもが自分で開け閉めしやすい袋に子どもの名前を書いて渡した（**図５**）。

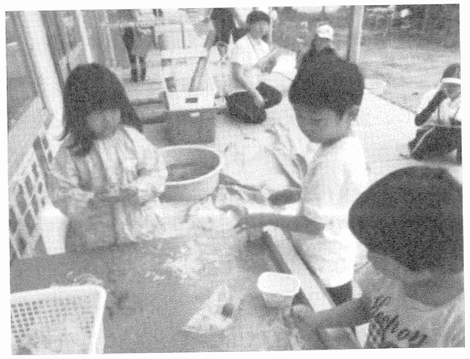

図５

子どもたちは自分で泥団子の様子を見ながら，袋の口を開けたり取り出して丸めたりと，願いが実現するよういろいろなことを考え，試しながら遊んでいった。うまくいかなかった子どもたちは，「泥団子を作ろう」の活動に参加をしたときに，どうすればうまくいくかを聞いて，その後の遊びのときにも泥団子をきれいに丸くする歌を歌いながら作ったり今までとは違う泥を試したりしていた。

泥団子作りで様々な土に興味をもった６月下旬，みんなが園庭での泥遊びをしたくなるよう，きっかけとして春に途中までしていた年長用の砂場を作る提案をした。築山の下は，過去の築山の土が混ざり合い様々な土が堆積している。掘っていくうちに，園児Ｃが土の違いに気付いたため種類ごとにバケツに分けて土を集めた（**図６**）。

図６

共有する活動でこの発見を伝えると，これまで外で泥遊びをしてこなかった子どもたちも，園庭に出てきて泥団子作りを始めた。また，堆積した土の様子から，園児Ｄは恐竜の化石が埋まっていると考えた。その日，教師はみんなの前で恐竜の絵本を読んだ。次の日に石を掘り出した園児Ｄは，その後何日もかけてその石をきれいに磨いていた。

図７

教師は，さらに，穴掘りをしていた場所に子どもたちを集めて，大きな石をみんなで掘り出す絵本を見せた（**図７**）。加えて，出てきた土の入ったバケツを，園庭を掘り返した場所に毎朝置いておいた。絵本を読んだ次の日から，宝物が埋まっていないかと，それまでとは違う子どもたちも土を掘り始めた。この中には，初めて自ら泥遊びをした子どももいた。

このように，「自分でみつけた遊び」「共有する活動」「行事」につながりをもたせることで，子どもが新たな遊びへの意欲をもち，友だちの遊びにも目を向けながら遊びに取り組んでいった。これまで泥遊びをしてこなかった子どもが，自ら園庭に出て泥団子を作ったことや土を掘り返したことは，これまで目を向けてこなかった自然物に関心をもって遊ぶ姿だといえる。この姿からも，この手立ては子どもが願いをもつことに効果的であったと考える。

(3) 子どもが面白さを追求していったコース作り（「深まり」を意識したはたらきかけ）

６月上旬まで，園児Ｃと園児Ｄは「自分でみつけた遊び」の時間のほとんどを園庭で過ごしていた。教師はこの２人の遊びの面白さをクラスで共有したいと考えた。築山で泥団子を転がして遊んでいた姿をとらえ，目に付く場所に樋（とい）を置いた上で，泥団子転がしを階段で試してもよいことを伝えた。すぐに２人は階段に樋を並べ，泥団子や松ぼっくりを転がし始めた。勢い良く転がる泥団子を見て，他の子どもたちも２人の遊びに参加し始めた。また，教師は共有する活動を設定し，コースで泥団子や松ぼっくりを転がす楽しさを共有できるようにした。

例年，樋のコースを作るときには，泥団子が樋のつなぎ目に当たって止まることがあった。そのため，樋のつなぎ目をどのようにするとよいかを試行錯誤し，うまくいったときに充実感を味わっていた。しかし，園児Ｄは最初からガムテープで上下の樋を平らにつなぐことができた。教師は，園児Ｄが樋のつなぎ方を示したことで，今年はより複雑なコース作りを楽しめるのではないかと見取った。また，子どもたちはコースをもっと長くしたいと考えていたが，廊下を通行する人の妨げになるため，長くできなかった。そこで，教師が梯子などに樋を固定し，樋の下を通行できるコー

スを作っておいた。子どもたちはそのコースを基に，自分たちでコースを作っていった。

コースがカーブしている場所では，泥団子の勢いが強過ぎて樋から飛び出してしまう。園児C，園児D，園児Eは，樋の面を傾けることでバンクを作り，泥団子をそこに当てると飛び出さないことが分かってコースを作った。また，樋を２つ合わせて筒状にし，泥団子が飛び出さないようにした（**図８**）。また，ゆっくり転がる松ぼっくりは手前のコースに落ち，勢い良く転がる泥団子はジャンプして違うルートを通るコースを作ることも思いついた（**図９**）。

図８

教師は，「さっきはうまくいってたのにね。なんでだろうね。」「ここら辺から落ちたから，ここを落ちないようにできれば最後までいくね。」などと，子どもたちが考えられるような言葉をかけた。そして，子どもたちが必要だと考えたことを形にできるよう，台になるものやカーブに沿って泥団子が転がる道具などを用意していった。

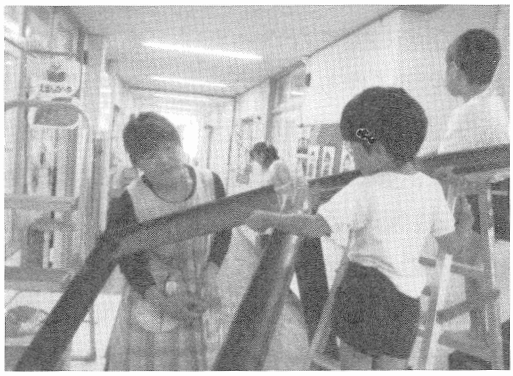

図９

このように，遊びの「深まり」を意識してはたらきかけたことで，子どもたちが思いや考えを互いに伝え合い手を貸し合いながら，自分たちで遊びをどんどん追求していくことができたと考える。その後も子どもたちは，コースの最後に音が鳴るようにベルや洗濯板をつける，泥団子がちらばらないようにカゴをつけるなどの工夫をしながらコースを作っていった（**図10**）。

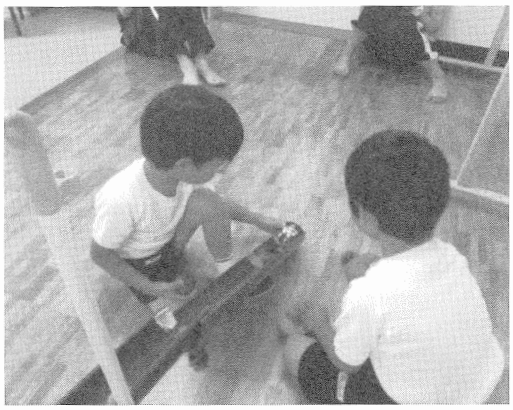

図10

５　おわりに

これらの実践から，この時期の子どもたちでも，願いをもって遊びを追求していく姿は十分に見られることが分かった。ただし，子どもの実態を見取り，この時期の子どもたちに相応しい手立てをしていくことが前提となる。

ジャングルの遊びでは，広がりを意識してはたらきかけることで，子どもがジャングルのイメージや遊びの楽しさを友だちと共有しているときに，クラスの全員が願いをもって遊ぶことができた。しかしながら，コース作りの事例のような，高度な追求を全員に求めることは子どもの実態にそぐわない。７期ではこのような高度な追求は個人か少人数で行い，クラスではイメージや楽しさを共有していくことが相応しいと考える。

また，７期では，願いやめあてをできるだけ教師に頼らずに自分たちの力で実現しようとする姿を期待した。教師は，子どもの興味や関心を引き起こす仕掛けを行った。その後，子どもがもった願いやめあては，できるだけ子どもの力で実現できるようにしてきた。この見取りとはたらきかけが，７期の子どもたちの実態に合っていたからこそ，上記のように，よく遊ぶ子どもたちの姿が見られたのではないかと考える。

（文責　内田　　祐）